

Quatre amis à Paris

井上 美穂

(INOUE Miho)

Université Sophia

m_inoue@t.toshima.ne.jp

1. はじめに

第24回関西フランス語教育研究会のCoins des éditeursの枠で、第二外国語フランス語の教科書『パリのともだち』の使い方とその補助教材を紹介した。この報告書では、語学教科書を作成する際に留意する項目を紹介し、各項目について検討を加えることにより、『パリのともだち』の特徴を明らかにする。

2. 対象・分量・媒体

教科書作成の際にまず考慮すべきなのは、どのような学習者を対象にするかという点である。

対象学習者：第二外国語学習者 / 専門科目学習者

今回は第二外国語学習者を対象とした。次に検討する必要があるのは、どの授業に使う教科書を作るかという点である。

対象授業：会話 / 文法 / 読解 / 総合的 など（二外の場合）

第二外国語の授業の多くが週2コマで行われ、一方が文法、もう一方が読解または会話に充てられている。文法・読解・会話の三者のうち、教科書が不足しているのが会話教材であることを踏まえ、主に会話を行う授業で使える教科書を目指した。

次は分量、つまりページ数を決める必要がある。25回～30回の授業で終了できるページ数であれば、週1コマで通年・週2コマで半期の両方の場合に対応できると考えた。1回の授業で学習できるページ数を2ページと想定して、50～60ページ分の課に、目次や語彙のページなどを加えた。

そして媒体については、紙でできた教科書以外に、DVD映像とダウンロードで入手する音声を用意した。DVDはイタリアで作られた既製品で、そこで展開される4人のともだちの話に合わせて教材内容を作成した。

3. 内容に関する検討項目

3.1. シラバスの選択

シラバスとは、「特定の教育課程の教育内容、学習項目の選択・配列を具体的に示した授業計画（英語教育用語辞典, p.297）」である。『パリのともだち』に関して、総授業回数に合わせた数の課を用意し、各課をどのような内容にするのか、つまりシラバスを選択しなければならない。

一般的なシラバスでは、各課に学習項目を割り当てて配列するという方式がとられ、日本のフランス語教育で伝統的に使われてきたのは、伝統文法の項目を順次並べるといったやり方である。すなわち、1課の冠詞から始まって、最終の課に接続法（最近では複合過去までというものが増えている）を学習項目として配列する方法である。

最近これと並行して採用されるようになったのが、notional/functional syllabus である。こちらは「言語の形式 (form) よりも意味 (meaning) を重視し、概念 (concept/notion) と機能 (function) を軸としたシラバス（英語教育用語辞典, p.208）」である。そして「言語が社会において果たしている機能（例：同意、依頼、謝罪など）と言語機能を遂行する際に表現される意味の枠組みである概念（例：時間、量、場所など）を中心に（ibid., p.208）」据えている。日本におけるこのタイプの先駆的教科書に、『フランス語 2001』がある。

多くの大学において週 2 コマの授業のうちのひとつが文法に充てられている実態を考慮し、『パリのともだち』では伝統文法の項目を順次配列することにした。そして、その文法項目を使って行える機能（例：紹介する、提示するなど）をそこへ組み合わせさせていった。

0 課 a： 文法項目「定冠詞」に機能「何かを提示する」を組み合わせる。

0 課 b： 文法項目「不定冠詞」に機能「何であるかをたずねる・答える」を組み合わせる。

0 課 c： 文法項目「名詞複数形」に機能「何があるかをたずねる・答える」を組み合わせる。

3.2. 発見型にするかどうか

各課の出発点に伝統的文法項目を据えることが決まったが、今度はこの文法規則を最初から提示するのか、それとも学習者による発見型にするのかという選択が必要である。例えば母音始まりの名詞につける定冠詞 l' に関しては、次の 2 通りの提示方法が存在する。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2010

方法 1：他の定冠詞 *le, la, les* とともに、最初から教科書に表示しておく。

方法 2： *le, la* を提示した後、まず *arbre (m)* に *le* を付けさせておいてから、音声教材 *l'arbre* を聞かせ、*le* から *l'* への変更に学習者自身で気付かせる。

一般的に、自分で発見したことは記憶に残りやすいといわれており、実際にこの方式を取り入れた教科書も作成したことがある¹⁾。しかし発見型にすると紙面が余分に必要となるため、今回は会話練習にスペースを重点的に割り当てることを念頭におき、発見型の採用は見送った。

3.3. 練習テクニック「パターンプラクティス」

フランスで出版されている教材を見てとまどうのは、会話に必要な表現の提示のあと、すぐに「それでは隣の人と、○○について会話しましょう」という練習問題が続くことである。しかもその会話を実現するためには、直前に学習した表現以外の多くの表現が必要となる場合が多い。週 2 回の授業以外にフランス語を耳にすることがない学習者に対し、この練習を行うのは至難の技である。学習者が前週までに学習した表現も覚えていないことを考えると、その授業で学習した表現を中心に、前回までに学習した表現を少し加え、繰り返し同じパターンで会話練習を繰り返すという方法が日本の第二外国語初級にもっとも適しているのではないかと考えた。以上の理由により、会話練習部分にはパターンプラクティスというテクニックを採用した。

過去に流行したパターンプラクティスに関しては、次の 2 つの欠点が指摘されている。

欠点 1：正しい形式を重視した機械的な練習が多く、その単調さが理由で学習者が飽きてしまう。

欠点 2：意味への配慮が少ないため、練習した表現を実際の場面で使う力がつかない。

しかしパターンプラクティスには、何回も同じ表現を繰り返すことにより、その表現を学習者に習慣づけることができるという長所があり、この点が第二外国語学習に適している。そこで、このテクニックに次の改良点を加えた。

改良 1：当時のパターンプラクティスは、カセットテープや教員の音声を相手に繰り返しを行っていた。これをやめて、隣の人とペアを組んでの会話形式に改めた。

改良 2：その会話が行われる場面を設定し、その場面を表すような絵を加えた。







以上の改良パターンプラクティスを用いた教材『絵を見て話そうフランス語』を使った授業で、授業時間のどの程度を口頭練習に費やしたかを調べた実験結果を紹介する²⁾。90 分の授業時間を 100% とした場合、「ペアでパターン練習」に 36%、「リ

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2010

ピート」に 11%、「発音練習」に 4%の時間が使われていた。つまり、合計 66%の時間中、学習者は口を実際に動かしていたことが判明した。もちろん教材やその使い方によってこのパーセンテージは異なるが、6割以上の時間を口頭練習に費やせる可能性があるパターンプラクティスは、会話の授業にふさわしいテクニックと言えるだろう。

3.4. 新たに加えた工夫

ペアで行う会話の繰り返しを増やすために、今回新たな工夫を加えた。フランス語の文字によるヒントを徐々に減らしながら、会話を繰り返せるようにページをレイアウトした点である。以下の『パリのともだち解答集』からの抜粋を例にあげる。一番右の縦列を紙片などで隠すと、文字によるヒントが少なくなった状態で会話練習ができる。さらに紙片を左にずらして右の縦2列を隠すと、さらにヒントが少なくなった状態で同じ会話練習が繰り返せる。このようにして最終的には左側の絵だけでペアでの会話練習ができるようになることを目指すのである。

		A: C'est qui	(1) le garçon	blond ?	
(1) Georges (New York)			(2) la fille	brune ?	
	(2) Yu (Shanghai)		(3) le garçon	brun ?	
			(4) la fille	blonde ?	
(3) Jun-Min (Pusan)			(5) la fille	brune ?	
	(4) Michelle (Los Angeles)	B: C'est	(6) le garçon	brun ?	
			(1) Georges. Il est	amé~	~ricain.
(5) Ji-Yung (Séoul)			(2) Yu. Elle est	chi~	~noise.
	(6) Gang (Pékin)		(3) Jun-Min. Il est	co~	~rée.
			(4) Michelle. Elle est	amé~	~ricaine.
			(5) Ji-Yung. Elle est	co~	~rée.
			(6) Gang. Il est	chi~	~nois.
		A: Il / Elle	vient	d'où ?	
		B: Il / Elle	vient	de ...	

3.5. 四技能の配分

90分間の授業を話すことだけに費やすと、学習者が飽きてしまう。「話す」ことを中心に据えながらも、四技能「聞く / 話す / 読む / 書く」を適切に配分することが授業の雰囲気作りに役立つ。そこで、各課に次のような技能の割り振りを行った。1課 a を例にとって説明する。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2010

1 課 a (pp.16-17)

- 練習 1 (聞く) : 大枠をつかむ聞き取り
- 練習 2 と 3 (聞いて書く) : 単語を聞き取って書く
- 練習 4 と 5 : 主語人称代名詞と否定形の解説
- 練習 6 (書く) : ペア練習する会話をまず自分で書いて準備する
- 練習 7 と 8 (話す) : パターンプラクティスを用いたペア練習
- 練習 9 : 発音練習

1 課 a (pp.16-17)のあとに、1 課 b (pp.18-19)、1 課 c (pp.20-21) が続く。読む技能を補うために、1 課 c には発音練習が無く、そのかわりに 1 課のストーリーを簡単なフランス語で要約した文章を読んで、穴埋めを行う練習が加えられている。

4. おわりに

パターンプラクティスが日本の第二外国語フランス語に役立つと思いつき、このテクニックを活用した教材を作り続け、今回が三作目となった。二作目に加えた改良は「絵の導入」である。そして今回の三作目では、「ヒントを徐々に減らせるページレイアウト」を新たな工夫として加えた。今後も改善を加えつつ教材を作成し、日本のフランス語教育に貢献できるよう努力したい。

注

- 1) 『絵を見て話そうフランス語』
- 2) 井上, 2006.

参考文献

- 石野 好一 他 (1993) 『フランス語 2001』, 白水社, 東京.
- 井上美穂 (2006) 「科学研究費補助金：国立大学外国語サイバー・ユニバーシティ用コンテンツ開発研究による教材」, 『e-Learning 教育研究』第 1 巻, pp.36-45, e-Learning 教育学会.
- 井上美穂 北村亜矢子 (2001) 『絵を見て話そうフランス語』, 白水社, 東京.
- 井上美穂 フランソワ・ルーセル (2009) 『パリのともだち』, ピアソンエデュケーションジャパン, 東京.
- 白畑知彦 富田祐一 村野井仁 若林茂則 (2002) 『英語教育用語辞典』, 大修館書店, 東京.